

Kawasaki 美術館
金山平三の世界



「メリケン波止場（神戸）」 1956-60年（昭和31-35年） 33.3×53.0cm 油彩・布 兵庫県立美術館蔵

故郷神戸を描いた 数少ない一点

神戸生まれの金山だが、生涯にわたって手がけた風景画の中で、故郷神戸を題材にした作品はそれほど多くない。これは数少ないそのうちの一点で、類似の作品（神戸市所蔵の「港」とともに、メリケン波止場から東を望む構図で、港町神戸がとらえられている）。

「メリケン波止場」の名称は、この北側に明治時代アメリカ領事館があったことから通称となったもので、現在もなお人々に呼び親しまれている。また画面中央左寄りの、独特の五角形のファサードを示す建築物は、一九二九年（昭和四年）に建造された旧神戸商工会議所で、和洋折衷様式の建物は、一九八六年（昭和六二年）まで長らく神戸の人々に親しまれた。しかし地誌学的な精度以上に本作で金山が主眼に置いているのは、空や水面の微妙な雰囲気表現であり、それが本作を単なる都市の描写とは一線を画するものとしている。

（兵庫県立美術館学芸員
相良周作）



金山平三と川崎重工

金山平三画伯は、1883年（明治16年）神戸に生まれ、1964年（昭和39年）80歳で生涯を終えました。1909年（明治42年）東京美術学校（現在の東京芸術大学）を首席で卒業した後、欧州各地で制作を重ね、1916年（大正5年）には、第10回文展に出品された作品が特選第二席になりました。生涯にわたって旺盛な創作活動を受け、自然風土を相手に多くの名画を残し、その業績は近代洋画史上に燦然と輝いています。

川崎重工は第11回文展に出品された「造船所」が縁となり、その後、交流を深めました。画伯の晩年には、自選作品138点の永久保管の依頼を受け、その作品を預かるほどでした。後になり川崎重工は、一部の作品を残して、兵庫県立近代美術館（現・兵庫県立美術館）にすべて寄贈しました。